



2023 年 (令和 5 年)

3 月号 (No. 934)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

第 2 回 GHT 踏査レポート〈下〉難関スリー・コルを越えクーンブへ	1
山岳地域における持続可能な開発会議とネパール観光	5
追悼 山岳写真家 岩橋崇至を悼む	6
追悼 石原國利さん追悼	7
植村直己冒険賞は「北海道分水嶺積雪期単独縦断」の野村良太さんに	8
連載 ■ ご当地アルプス登山案内	
② 須磨アルプス	9
③ 上郡アルプス	10
東西南北	12
支部だより	
北海道支部／神奈川支部	13
図書紹介	15
会務報告	17
新入会員	18
図書受入報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20 時
水・金 13~20 時
第 2、第 4 土曜日 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 10~18 時

第 2 回 GHT 踏査レポート〈下〉 難関スリー・コル越えクーンブへ

吉井 修

第 2 回 GHT もいよいよハイライト。東海支部ゆかりのマカルー BC を訪れた後には、「スリー・コル」と呼ばれる難関、6000m 前後の峠越えが待っていた。残念ながら 1 名がリタイアしたが、3 名の隊員はトレッキング・ルートとは思えない困難な峠の登下降をクリア、待望のエベレスト街道に到達したのだった。

マカルー BC 到着

11 月 2 日ランマレ・カルカ〜3 日マカルー BC〜4 日スイス BC〜5-6 日シェルパニ・コル BC〜7 日シェルパニ・コル下〜8-9 日バルンツェ BC〜10 日アンプラブツァ BC〜11 日イムジャ湖畔
11 月 2 日、3557m のヤングリ・カルカを出発して、マカルー BC へと向かう。バルン溪谷を遡

っていくが、マカルー BC までは往復するトレックカーがそれなりの数いるので、整備された良く踏まれた道であった。欧米人だけでなく、ネパール人のトレックカーにも出会った。ネパール人にもガイド・ポーターとして働くだけではない時代がやって来ている。
この日はランマレ・カルカ(410m)の小屋に宿泊。この小屋では独りでマカルー BC を往復し

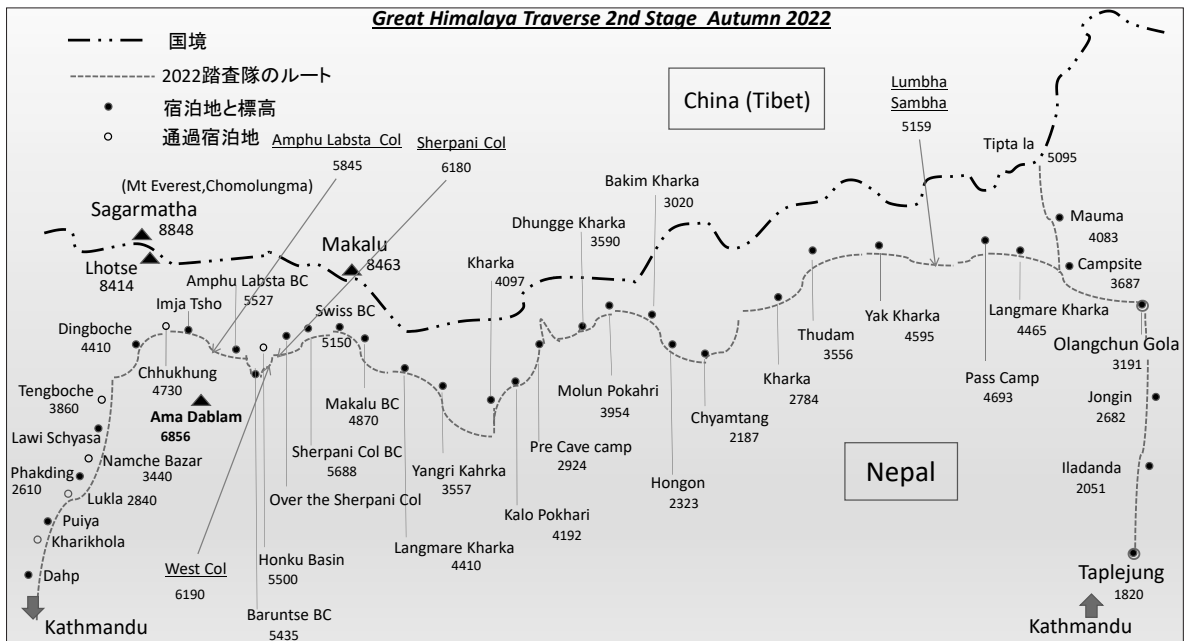
てきた英国人女性に出会った。藤井さんと小屋の焚火場で歓談したが、彼女はウルトラトレイル・デュ・モンブランで 5 回も優勝しているという。小さな荷物で着の身着のまま。この後、新しいトレランコースを求めて南の方へ迂回し、エベレスト街道の方まで走っていくという。世の中には強者がいるものだ。
翌日、ランマレ・カルカを出ると、ピーク 6 をはじめヒマラヤ襲のすばらしい 6000m 峰が現われ、景色が変わってくる。11 月 3 日(歩き出してから 26 日目)にマカルー BC(4870m)に到着した。1970 年に日本山岳会東海支部が初登攀(マカルー登頂自体は第 2 登)した東南稜が間近に見える。せり上がる東南稜の先にマカルー

頂上(8463m)があった。さすがの姿だ。

スリー・コルを越えて

さて、ここからの 1 週間が正念場のスリー・コル越え。その後、1 週間でエベレスト街道を下っていくことになる。

ヤングリ・カルカで 1 日休養したので、マカルー BC では休養を取らず 11 月 4 日出発。マカルー BC から先に進む人はぐっと少なくなる。バルン氷河のモレーン上を登っていく。高度は 5000m を越えて、スイス BC が近づくころ、バルン氷河の奥にローツェ、そして、その右奥にエベレストが見えた。私はエベレスト初見参である。この日はスイス BC(5150m)泊。



5日は途中からバルン氷河を離れて左の谷へ入り、岩がゴロゴロの山腹を縫って登り、シェルパニ・コル(5688m)へ入った。この日は高度のせいもあつたが結構な悪路で、相当のアルバイトを要した。1日休むことになり、7日がいよいよシェルパニ・コル越えと決まった。6日の休養日、キタップ以下4人が偵察に出た。「シェルパニ・コルの取付まですはフィックスはない。コルから下りると

き、荷物はロープで降ろす必要がある」との情報もたらされた。7日は8時過ぎに出発。氷河を右手から登り、雪上に出た所でアイゼンを装着した。後は広い雪の谷を前方の鞍部目指して登っていく。背後にマカルーが堂々たる姿ですばらしい。12時20分、シェルパニ・コル下に着。このとき前に登ってきたイタリア隊の隊員ら5名が先に降り付いていた。先行していた両隊のポーターが、コルからの荷降ろしで渋滞しているという。

30分待つて出発。ワイヤーロープにセルフビレイを取り、フィックスロープにアッセンダーを装着して登っていく。高度があるので、セルフビレイの取り直しにも息が



マカルーをバックにシェルパニ・コルへ向かう

上がる。焦るな焦るなと言いつつ、せながら、一步一步確実に、ゆっくりゆっくり登り上がった。13時30分、シェルパニ・コル上(6180m)に立つと、その向こうにチャムラン(7321m)やバルンツェ(7152m)のすばらしい光景が眼に入ってきた。ウエスト・コルに続く広い雪原に目を見張る。

両隊の荷降ろしで渋滞していて、コル上に1時間20分もいた。コルの下りはフィックスロープ伝いにビレイだけでなんとか下りることができたが、荷降ろしの苦労があり、スリー・コルの中で最も通過に時間を要した。全員がコルから下りたのはもう16時30分。すぐコル下にテントを設営。急激に寒くなり、逃げ込むようにテントに入ったのは17時30分であった。

残念、1名がリタイア

翌8日はウエスト・コル越え。



通過に時間を要したシェルパニ・コル

9時30分、テント場から10mほど登ると、そこは広大な雪原。ここは全行程中のハイライトとも言える場所。背後に越えてきたシェルパニ・コルとマカルー、右手にバルンツェ、左後ろにチャムランという絶景。まさに空中散歩の感で私は喜びをかみしめながら歩いた。しかし、昨日の6000mを越えるシェルパニ・コルの登降で消耗されたのか、最後尾の藤井さんの歩みが遅い。

ウエスト・コル(6190m)は雪原から一段低いようにも見える



トラバース中のハイライトだったウエスト・コル

所で、コルそのものの登りは10mほど。11時15分、コル上に立った。下りは懸垂下降。重廣さんが「同じようにセットするんだぞ。丸尾さんにも伝えるんだぞ」と言いつつ先行された。徐々に斜度は緩くなつたが、50mのフィックス3本を懸垂下降で下りた。最後に斜めにビレイのみで1本。これだけの距離を懸垂下降で下りるのは実は初めてのこと、私は緊張感で胸いっぱいだった。

しかし、ウエスト・コルを越えた西側も抜群の絶景。アマ・ダブラム(6856m)の威容がひととき目を引く。周囲の絶景に励まされつつ頑張つて下つて16時50分、バルンツェBC(5435m)にたどり着いた。バルンツェBCには営業小屋があり、常設のテントも張られていた。私たちは自分のテントに泊まったが、食事は小屋のダイニング・テントで、小屋のものをオーダーし

て食べることにした。

藤井さんの消耗が激しく、夕食時、明朝起きて行動することが難しいようなら、救助ヘリを呼ぶことに決まる。明日を休養日とする選択もあるのでは、と思えたが、「この高度で1日休養して良くない試しはない。明朝動けないようなら、一刻も早く下りるのが得策」という判断であった。

結果、翌9日は朝から衛星電話を通じて救助ヘリを手配、歩き始めて32日目、藤井さんは先にカトマンズへ向かわれた。また、この日の未明、シェルパニ・コルで行っていたイタリア隊の30歳台のポーターが、心臓発作で亡くなるという悲しい出来事があった。やはり6000mの世界、一つ間違えば、何が起るか分からない。この日は藤井さんのリタイアと、イタリア隊の遺体収容のため2台のヘリを見送ることになり、停滞日となった。

最後の難関アンプラブツァ

翌10日からは3人での行動。アンプラブツァBCまでは氷河を下り、美しいポカリ(池)のほとりを歩く、なかなかの景色の行程。ア



トレッキング・ルートとは思えないアンブラプツァの下り

12・13日デ
インボチェ
〜14日ラウ
ササ〜15日

ンブラプツァは最難関との認識だったが、メラ・ピークとアイランド・ピークの2峰を一気に登る意欲的なトレッカーが通過するといふ。前2つのコルに比べ通過者が多いので大丈夫だ、とラムカジが言う。何よりもアンブラプツァを越えたら、後はエベレスト街道まで駆け下るのみ、安全圏に逃げ込める。そう思うと明日が待ち遠しかった。アンブラプツァBC(5527m)にも営業小屋があった。

11日8時30分、BCを出発。コルを目指して、とにかく一步一步登る。コルの登りとしては一番しんどい。フィックスロープが張られた岩をアッセンダーで強引によじ登ると、雪が出てきた。11時20分、アイゼン装着。装着してから懸垂

氷河を横に30分ほど登ると、アンブラプツァ(5845m)であった。休まずに早速下りにかかる。目の前にバルンツェ、それに続く尾根がぐぐつと弓なりに下がっている。その横を急激に下りていく。少し下って懸垂下降。最後の1本であったが、これまでのどれよりも傾斜がきつい。重廣さんが下りられるのを待って次が私。まっすぐ下りると、少しハングして宙に浮いてしまう。「重廣さん、どこを下りられましたか」と叫びながら、やや左寄りに下りてなんとか着地することができた。ああ、助かった、もう大丈夫なんだ、と安堵感でいっぱいであった。通過者は多いというものの、やはりアンブラプツァは最後にして一番の難関。

「これはトレッキンググ・ルートとは言わんなあ」と言い合った。

パクディン〜16日パイヤ〜17日カールとブクサの間からジープ

アンブラプツァを越えてからも長かったが、途中で1泊テント泊。12日、チュクンを経てエベレスト街道のデインボチェ(4410m)まで下りた。チュクンの手前、アイランド・ピークから戻ってくる道と合流すると、そこからは世界のトレッカーがいっぱい。チュクンではウクレレを奏でる西欧女性に目を奪われた。

後はエベレスト街道。重廣さんが昔の面影全くなし、と言われる賑わいぶり。私もちよつとびつくり。山小屋やレストランが立ち並び、空にはひっきりなしにヘリが飛ぶ。プロパンガスをはじめとするおびただしい物資が、ヤクやロバに担がれて登っていく。疲れた体ではあったが、安全な道ということのでゆつくり下った。ルクラからの空の便は避けて、ジープに乗れる所まで下って、「カトマンズの男」となった。

皆さんのご支援に感謝

長い山旅を完遂するには、怪我や故障を起こさないことが第一である。前回の第1回GHTで、私

は重廣隊長が40日間にわたる歩行の中で、尻もちはおろか一度も手をつかれるのを見なかったことに驚いた。私などは1日に1回やそこらは手をついてしまう。今回、私は勝負になるスリー・コル越えの前、マカルーBC(計画では歩行28日目、実際には26日目に到着までの道のりを、とにかく怪我なく着実に歩くことを第一の目標とした。元の勤務先のトレッキングの会の仲間が、饒別に八咫鳥(ちやうどW杯カタール大会の年でもあった)のシューズ・プレートを買って来てくれた。ありがたいことに、靴紐に通して靴の前部に着けたこのお守りは、足を踏み出すたびに目に入り、一步一步、慎重に行け慎重に行けと導いてくれることになった。結果としては、40日間歩いて手をついたのは3回、うち1回が尻もちであった。

急激な円安やネパール国内の事件費や物価高騰で隊の経費がかさむなか、本会会員の皆様をはじめとする多くの方々から、たくさん貴重な支援(寄付)を賜った。最後に、今回も多くの山仲間の応援に支えられてのGHTであったことを記して、御礼としたい。

CONFERENCE

山岳地域における持続可能な開発会議
とネパール観光

文・柏澄子 写真・柏倉陽介

昨年11月中旬から約3週間、ネパールを訪問した。目的は、ネパール観光局が主管する国際会議「山岳地域における持続可能な開発」(12月1〜3日)への出席と、

国内の観光地を回ってネパールの魅力を日本人に伝え、日本人のネパール観光を促進するための取材だった。写真家の柏倉陽介さんとプロ登山家の竹内洋岳さんをお誘いし、3人の旅が始まった。

国際会議は、2002年の国際



会議の行なわれたカトマンズ郊外のチャンドラギリ・ホテルからは、ヒマラヤの峰々が遠望できた



会議ではプロ登山家の竹内洋岳さんも講演した

山岳年から20年目を期して開催された。また、ネパールに続き12月には、全国山の日協議会が主催する「国際山岳年プラス20シンポジウムin黒部」も開かれている。

ネパールでの会議には、およそ100人が出席。加えてリモートの発表や参加も多かった。この20年間に地球温暖化による山岳地域の自然環境の変化は大きく、ことネパールにおいては、氷河の後退が深刻であることが指摘された。

一方で、山岳地域を利用する観光も大きく発展した。エベレスト山麓チベット側のロンブク氷河の観測結果や、ヒマラヤ登山を取り巻くガイドたちのシステムの発展などの報告もあった。

竹内洋岳さんは30年間ネパールに通い、ヒマラヤ登山を続けてきた中で感じたことをスピーチした。

一つは、気候変動で8000m峰の登頂日が遅れていることや氷河の後退など、登山を取り巻く自然環境の変化について。さらには、ヒマラヤ登山のパートナーやガイド役だったシェルパが、今や自国のヒマラヤで自分自身の登山をするようになったこと。また、個人的な経験の中から、30年前はキッチンボーイだった人物が、今や8000m峰登山のサードーになった、と感慨深げに語った。

ネパール側からは、通り一遍の観光やこれまでのような登山やトレッキングだけでなく、氷河の後退など気候変動によって環境が変化した現場を訪れる、エコツアーのようなものも考えていきたいというアイディアも発表された。

さて、私たちが取材先に選んだのは、チトワン国立公園とポカラ

近郊のベグナス湖などだった。チトワンではサファリを通じてトライ平原の自然を見聞。ポカラ界限で唯一モーターボートの乗り入れのないベグナス湖で、マナスルやアンナプルナ山群を仰ぎながら釣りをした。竹内さんは9年前の訪問に続き、「神の魚」とも言われる巨大魚・サハールを釣り上げた。

日本人にとってネパールは「登山をする人が行く国」「楽しみは登山とトレッキング」と思われがちであるが、エベレスト山頂から標高50m程度までの標高差があり、植物は垂直分布する国だ。標高ごとに生息する動物も異なる。ヒマラヤを源とする水が中級山岳地帯からトライ平原へと流れ込み、肥沃な土地を造っている。チトワンではその豊かな自然を味わった。

ヒマラヤを実感するには必ずしも登山やトレッキングとは限らず、ほかの土地でもヒマラヤの恵みを味わうことができる。また、ネパールは多民族国家であり、音楽や絵画、踊りや食事などそれぞれの文化があるので、これらを体験するのも楽しい。これからのネパール観光が、一層幅広く多様なものになっていくとよいだろう。

追

OBITUARY

悼



山岳写真家 岩橋崇至を悼む

三宅 修

岩橋崇至君は1944年生まれで、私よりひと回り若い。戦争を

知らない世代だから心身ともに健康な上、父親が日本画家・岩橋英遠という美的感覚に恵まれた家庭に育った。

慶應義塾大学のころ山にのめり込んだ。それは、やがてヒマラヤ登山隊の隊長まで務めるほどの熱量であった。山の感動を映像に残そうと、慶應卒業後、日大芸術学



岩橋崇至(いわはし・たかし)

会員番号9374

1944年 東京都世田谷区に生まれる。日本画家・岩橋英遠の三男
1967年 慶應義塾大学商学部を卒業。引き続き日本大学芸術学部写真学科を卒業
1970年 フリーの写真家として独立
1978年 慶應アルペンフェライン山岳会隊でコンデ・リ初登頂
2000~01年 『新世界を開く世界10人の山の写真家展』に日本からただ1人選ばれる
2022年11月28日 逝去、享年78
写真集は『谷川岳』『北ぐにの山々』『黒部溪谷』『THE ROKKIES』『白頭山』『北アルプス大百科』など多数

部で写真の基礎から学ぶという徹底ぶり。その日大時代、山と溪谷社の元編集者で山岳写真家、しかも同じ慶應の先輩という山下喜一郎と出会い、師事するようになったのも不思議な縁。

戦後の混乱が一段落したころ、マナスル登頂で日本の山ものにぎわい始め、山岳写真を目指す若者たちが集まるようになった。こうして生まれたのが山岳写真のプロを目指す日本山岳写真集団である。初代会長は私であった。その集団に岩橋君が加わったのは草創期。

彼とは挨拶代わりに一度だけ冬

の穂高を目指したことがある。上高地から横尾、涸沢への夏道通しに行くつもりだった。しかし、上高地まで入ったものの、その年に限り連日の猛吹雪。結局1週間の籠城で出直しとなってしまった。

その代わり3つの収穫があった。

第一、通常ならためらうような気象条件下にもかかわらず、岩橋君が機材一式を背負って毎日出かけていたこと。

第二、初対面は無口な男という印象だったが、思った以上に無口なこと。写真家は単独行が多い。微妙な自然現象の変化を受け止める神経の集中力を緩めない方が良い。無口とはそんな習性の表現だ。

第三点、子細は覚えてはいないが、あれこれと気の回ること。

私は猛吹雪の中とうとう外へ出ないままだった。

後日、「あのときの収穫は」と聞いたとき、暗い背景に無数の白い斜線が写るフィルムを見せてくれた。シャッターやレンズを替えて撮影したテストフィルムだった。

結果は判っていても、念には念を入れる態度に感心した。この男のいる限り、山岳写真は末広がりになるに違いない。山下君は

良い弟子を持った、と思った。

当時、集団には日本全国の名山を個人作品として集大成する大胆なプランがあった。新人の彼は北海道全域、同じ新人の石橋睦美君は東北全域という途方もないものだった。この仕事を彼らは黙々6年かけ、すばらしい成果を上げたと思う。しかし、出版担当者のミスでまとめられずに終わった。

そんな失敗もあったが、いい仲間たちに守られながらの『THE ROKKIES アラスカからメキシコまで』という大仕事や、『アルプス大縦走』『黒部溪谷』『白頭山』などスケールの大きな山岳写真の成果を上げていった。人格も大きく育って、どんな華麗な人生最後の集大成を見せるか、と期待していたのに突然の訃報とは……。巨星落つ、という想いで言葉もない。岩橋崇至こそ山岳写真の本物のプロであった。人柄といい作品といい、私は脱帽する。

「人を取り除けてなおあとに価値のあるものは、作品を取除けてなおあとに価値のある人間によって作られるような気がする。」

大好きな辻まことさんの言葉で見送りたい。

石原國利さん追悼

尾上 昇

東海支部のレジエンドがまた一人旅立った。石原國利さんである。本年1月29日、享年94、大往生である。

東海支部は、昭和36(1961)年5月、石岡繁雄さんを中心に設立された。石原さんは、石岡さんの愛弟子ということもあって、石岡さんとともに支部の設立に奔走している。設立後も、多忙な石岡さんに代わって、当初から常務委員として支部運営の中心を担っていた。

石岡さんは、周知のとおり戦後日本の登山界の復興に多大な功績を残した人である。屏風岩の初登攀、地方の一高校の山岳部OB会をルーツとする「岩稜会」を日本有数の山岳会に育て上げ、一方で写



石原國利(いしはら・くにとし)

会員番号5180

1930年 福岡県直方市に生まれる
1948年 中央大学入学と同時に岩稜会に入会
1955年1月2日、前穂高岳・東壁で遭難(ナイロン・ザイル事件)
1960年 全日本山岳連盟のビッグ・ホワイト・ピーク登山隊に参加
1961年 明神岳5峰赤壁冬期初登攀
同年5月 東海支部設立、常務委員就任
1965年5月 東海支部長就任
1966年 東海支部のアコンカグア南壁隊副隊長を務める
1967年 父君の逝去により直方市へ帰省
2023年1月29日 逝去、享年94

真集『穂高の岩場』を刊行、そして東海支部の設立である。さらには岩稜会の山行で起きたナイロン・ザイル事件でザイルの切断の原因究明に心血を注ぎ、社会問題にまでなっていることは、のちのちまでの語り種となっている。

この岩稜会の一員であった石原さん、登攀歴もなかなかのものである。岩稜会は活動の場が穂高中心であったが、石原さんは、余り注目されていなかった明神岳の岩場に着目、この開拓に力を注いでいる。なかでも困難視されていた5峰赤壁の中央ルートに、それぞれ1960年と61年に無雪期と積雪期の初登攀を記録している。

また、海外にも足跡を残している。60年春、ジュガール・ヒマールのビック・ホワイト・ピーク(レインボ・ガン)と66年の東海支部最初の海外遠征、南米アコンカグア

南壁である。アコンカグア隊では、このときは須賀太郎・初代支部長から後を引き継ぎ、第2代支部長のかたわら、自ら副隊長となつて隊をリードしている。さらには、マカールの許可取得交渉に単身カトマンズに乗り込むなど、まさに八面六臂の大活躍であった。

ところが、この石原さんに突然支部との別れの時がやって来る。その訳は、ご尊父が若くして急逝されたからである。実家は、福岡の直方で化粧品や雑貨の製造販売業を手広く営んでいて、石原さんは後継ぎだったのである。

いずれは実家に戻ることになっていたのだが、こんなに早くその時期がやって来ようとは、想定外だったはずである。支部としても痛かったが、石原さんとしても後ろ髪を引かれる思いの東海支部との別離であつたであろう。

石原さんの退いた後は、中世古隆司さん、沖允人さん、原真さんらが中心となつて支部運営に当たった。ちなみに湯浅道男さんと筆者は、まだ新参者の支部員で、活躍の場はもう少し後になる。

この石原さん、福岡に戻られても東海支部を離れたわけではない。

お亡くなりになるまで支部員として、支部の主要な行事には必ず出席され、支部運営へのアドバイスなどのほか、何くれとなくお氣遣いいただいた。昨年6月の東海支部60周年の記念集会にも参加のご意向だったが、高齢ということで、コロナウィルス感染を心配され、急遽取りやめられている。

あれからたつた半年余りでの訃報である。それが判つていれば、無理矢理にでもご参加を要請したものを。今となつては、実に残念で仕方がない。きつと石原さんも、黄泉の国でそれを悔いておられるに違いない。今はただ、石原さんの霊安らかなれと祈るのみである。

ところで、この拙稿の中でナイロン・ザイル事件に触れたが、「石原國利」と聞いて、実は石原さんがこの事件の張本人であつたと氣付いた人は、何人いるだろうか。この事件をモチーフとして井上靖が小説『氷壁』を著しているが、この中の主人公・魚津恭太のモデルこそ、石原國利さんその人なのである。この機会に今一度『氷壁』を読み返されて、故人を偲んでいたければ幸甚である。

(東海支部常任評議員)

NEWS

植村直己冒険賞は「北海道分水嶺積雪期
単独縦断」の野村良太さんに

今年27回目を迎えた「植村直己冒険賞」は、「北海道分水嶺積雪期単独縦断」を成し遂げた野村良太さん(28歳)に決まった。植村直己が冬のデナリに逝ったのは1984年の2月のことだが、その10年後の94年に野村さんは生まれた。

発表記者会見は2月6日、東京・市ヶ谷の私学会館で行なわれ、同時に植村の母校である豊岡の小学校でもオンラインで発表があった。主催者の関貫久仁郎・豊岡市長が挨拶、選考の経緯は選考委員の一人である、冒険家で医師の関野吉晴氏から説明があった。まず受賞者の若さと、冒険賞が初めて海外ではなく国内の冒険だった点が評

価された。続いて野村さんが紹介された。

「本当に僕でいいんでしょうか」
本人から戸惑いと受賞の喜びが率直に語られた。謙虚で飾らない人柄が好印象だ。

今回の挑戦は、北海道最北端の宗谷岬から南端の襟裳岬まで、全行程670kmに及ぶ分水嶺を北から南へ縦断。2022年2月26日から4月29日まで63日間かけて歩き通した、史上初の記録となった。これまで誰も試みていない、計画の独創性が高く評価されたものだ。野村さんにとって今回の挑戦は初めての試みではない。1回目の21年は、南端から北を目指したが、



植村直己の特大大パネルの前で喜びの野村良太さん

いくつかの失敗が重なり撤退を余儀なくされた。今回は全てにおいて計画を見直し、出発の時期、デポ数や日程の調整など再確認したうえでの挑戦だった。猛烈なヤブ漕ぎを敬遠し

て、積雪が十分な時期に出発を合わせ、技術的に難易度が高い山域を後回しにして南下するルートを選んだ。

それでも最大45kgのザックを背負ったの踏破は厳しく、強風や降雪、ホワイトアウトなど、縦断は苛酷を極めた。あらかじめ5ヶ所の避難小屋に食料をデポしたが、途中、ネズミにかじられるなど予期せぬ事態に遭遇、困難を回避しながらルートを延ばしたという。極地探検を参考にして食糧計画を練ったというが、1日3500kcalを摂取しながら進む縦走は、並大抵のものではなかったはずだ。

「せっかく北大に入学したんだから、北海道らしいことをやりたかったですね」

そう野村さんは笑顔を見せる。発端となったのは30年前の書籍『北の分水嶺を歩く』(1994年、山と溪谷社)の著者、工藤英一氏の「あとがき」の言葉だった。しかも野村さんはこの年の生まれで、因縁めいたものさえ感じてしまう。「いつの日か誰かに、人並はずれた艱難辛苦に耐える精神力と強靱な体力の持ち主に、挑戦し実現してもらいたい。(中略)これからの

若き岳人に期待している」と。その期待に応えるかたちで、野村さんは単独で挑戦、踏破に成功した。

ちょうど1年前の3月31日、大雪山系の沼ノ原は快晴の朝を迎えていた。これ以上ない雄大な雪原の中に野村さんはいた。折から取材で飛んで来たNHKの空撮映像の中で、野村さんの言葉が全てを物語っている。

「2ヶ月、とても長かった。とても充実していた。こんなにも濃い2ヶ月は今後の人生にももう訪れないかもしれない。辛いことが90%以上だったけれど、残りの10%が補って余って溢れるほどに幸せに満ち足りていた」

あの一瞬のために、すべての苦労が報われる……。登山や冒険は、その感動があるからやめられない。厳しい行動の連続だっただろうが、テントの中でほっとひと息、「山に感じる幸せ」を実感できたという野村さん。

今年は、ヒマラヤの未踏峰ジャルキヤ・ヒマール(6473m)を目指すという。植村がいつも目指した「新たな挑戦」に、2世代若い野村さんが続く。

(『山岳』編集長・神長幹雄)

連載■で当地アルプス登山案内29

須磨アルプス

関西支部 加藤芳樹

六甲山地のご当地アルプスといえ、真つ先に思い浮かぶのが「須磨アルプス」である。そのほか古くからの呼称に「六甲アルプス」（932号参照）や、菊水山北の城ヶ越あたりの「神戸アルプス」などがある。六甲アルプスは『六甲』（昭和8年、竹中靖一著、明文堂）をはじめ阪急電車のハイキング・マップなど、神戸アルプスは神戸徒步会（KWS）関連資料と、いずれも戦前の資料に散見される。

現在最もポピュラーな須磨アル



旗振山から遠望した淡路島と明石海峡大橋

プスだが、戦前の資料にその呼称は見当たらない。それどころか、六甲関連のガイドブックや登山地図で、須磨周辺を扱ったものが少ない。わずかに、昭和16（1941）年発行の『近畿の山々と史跡巡り』（藤田元春著、成象堂）が「須磨裏山」として、「省線神戸駅〜長田神社〜高取山〜那須与一墓〜横尾山〜多井畑峠〜高倉山〜鉄拐山〜鉢伏山〜須磨駅」のルートを紹介し、「横尾山はピラミッド型に峙つて神戸槍の呼称があるほど、花崗岩の風化した奇観を現わし、アルプス気分を味うに足りる」と書く。

【コースガイド】

起点は現在行なわれている六甲全山縦走大会と同じ、須磨浦公園である。歴史好きなら須磨浦公園駅からいったん国道に出て、少し西にある敦盛塚に立ち寄るとよい。駅の西、敦盛橋を渡るとすぐに登山口がある。ひと登りして須磨浦公園内の石段を登り、須磨浦ロープウェイの山上駅に出る。すぐ右

手に六甲全山縦走路が続くが、ここは直進して鉢伏山（240m）の山頂を踏んでいく。

下り始めるとすぐに縦走路と合流する。次のピークの旗振山（253m）は、

その昔、大阪の米相場を各地に伝えるために旗を振っていたことから名付けられた山で、今は電波塔が立っている。また、旗振茶屋や、大正11（1922）年創立

の老舗登山会、神戸ヒヨコ登山会の署名所もある。旗振山から緩やかに下り、義経の

一ノ谷の逆落として知られる一ノ谷への分岐を見送り、ウバメガシの純林を抜け、鉄拐山の取付へ。左に迂回路があるが、正面の急坂を一気に登り鉄拐山（234m）の山頂に立つ。下っていくとやがて公園のような場所に出る。このあたりを「おらが山」と呼び、小高い



丘に休日だけ営業する「おらが茶屋」が建っている。

さて、この先、長い階段を下って高倉台団地を通過するが、ここには以前、高倉山（292m）があった。「山、海へ行く」というフレーズとともに昭和42（1967）年から高倉山は徐々に削られ、今、大阪湾に浮かぶポートアイランドが誕生した。

高倉台団地を抜け、全山縦走路の道標に従ってつつじ橋を渡り左折すると、縦走路名物の梅尾山の



須磨アルプスの核心部と東山。左は高取山

階段が現われる。このあたりが高倉山を下った所にあつた多井畑峠だろう。ひと登りしてしばらく進むと、展望台のある榎尾山山頂だ。ちなみにつつじ橋を渡って右の、「文太郎道」と札のある山道でも榎尾山にアプローチできる。ただし、古い地形図では多井畑峠を経由するのが素直な道筋だから、加藤文太郎がここを通ったわけではないだろう。

次の横尾山(312m)から先がいよいよ本ルートの核心部となる須磨アルプスである。山頂を越えるとともに簡単な鎖場があり、急激に下り始めると突然、目の前に荒々しい風化花崗岩の景色が現わ

れる。見た目は迫力があるが、下りは階段も設置され、特に危険箇所はない。ただし、ルートを外すと足元が崩れるので、無理は禁物だ。最低鞍部まで下って岩場を登り返す。目の前に現われた細いリッジは「馬ノ背」と呼ばれ、通過すると須磨アルプスはあつてなく終了する。ベンチのある東山に登り、ひと息つくといよい。

東山からさらに縦走路を進んで高取山に登ってもよいが、市街地を挟むので板宿方面に進んで、もう少し登山の雰囲気味わいたい。道標に従いつつ板宿八幡神社を目指す。神社からは階段を下り市街地へ。市街地は少々複雑。ちなみに山陽電鉄・板宿駅は地下駅である。

【コースタイム】 須磨浦公園駅(40分) 旗振山(25分) おらが茶屋(45分) 横尾山(20分) 東山(30分) 板宿八幡神社(15分) 板宿駅

【交通アクセス】 往路Ⅱ山陽電鉄本線・須磨浦公園駅 復路Ⅱ山陽電鉄本線・板宿駅

【参考文献】 国土地理院2万5000分の1地形図「須磨」 アルペンガイド『関西周辺週末の山登り123』分県登山ガイド『兵庫県の山』(ともに山と溪谷社)

連載■ご当地アルプス登山案内30 上郡アルプス

「上郡アルプス」は兵庫県の南西部、赤穂郡上郡町にある508mの船岩山を最高点とする、標高ほぼ400m前後の山域である。地質は全体に火山岩質で、生駒山は凝灰角礫岩、大鳥山・大観峰・小美女平は流紋岩で構成されている。コースには昭和10年代まで、金山として操業していた旭日鉱山跡や銅鉱石の精錬所跡もある。

基本3・5kmのコースだが、地元「上郡アルプス実行委員会」が32kmのフルコースを完成させ、2020年3月にお披露目された。フルコースの途中からは何箇所かのショートカット下山道も利用することができ、それぞれの体力に合った登山が可能となっている。

また、ルート上には南北朝時代に活躍した赤松円心ゆかりの苔縄・駒山・大聖寺山城跡や、明治の偉人・大鳥圭介が学んでいた岡山閑谷学校への通学路も含まれているので、歴史に興味のある人にも魅力的なコースではないか。

本稿ではその基本3・5kmと、

関西支部 前田正彰

大鳥山から岩木山まで往復するコースを紹介する。なお、生駒山は江戸時代に編纂された『播磨鑑』にも「駒山」となっており、地元では今も「こまやま」と言い慣わされているが、ここでは国土地理院の地形図を尊重して、「生駒山」に統一して記すことにする。

【コースガイド】

JR山陽本線・上郡駅から閑静な町中を北西に歩くことほぼ1・5km、丹東公民館の横を抜けると



羽山から望んだ大鳥山(右)



羽山の登り口に着く。小さな谷筋を上がるとすぐに尾根道となる。登山口から500mほどで羽山(四等三角点山野里、193m)に着く。そこからゆったりとした尾根筋を北に進むと、少し開けた小美女平(204m)だ。

小さな上り下りの後、大観峰(281m)の頂に着く。文字どおり360度の絶景が楽しめる。「小美女平」「大観峰」というネーミングも面白い。私たちが訪れたのは7月の半ばだったが、このあたりから汗が噴き出てきた。それでも木陰とときどき吹いてくれる涼風がありがたく感じられた。大観峰から400mほど尾根筋を北にとると、基本コース上では最も高い大鳥山(282m)に着く。ここからの展望も雄大で、北東方向に千種の清流、東には絶壁を隔てて生駒山が、そして、南には今通つて来た大観峰の次にある290mピークが間近に見える。

今回はここで小休止をして、いったん基本コースを西にそれ、岩木山までの往復コースを紹介する。大鳥山から一度200mほど北に進んで、西に折れる。そこから岩木山まではほぼ一直線の尾根道となる。まずは大鳥山から約600mの鍛冶山(四等三角点鍛冶、277m)、そこから約500mで舟谷山、さらにそこから1・2kmほどで鳳凰山(311m)と続く。

鳳凰山と岩木山の間に「航空機ビューポイント」(315m)という地点があって、岡山空港へ離着陸する低速・低空位の飛行機が眺められるのだそう。今回歩く中では最西端の岩木山(三等三角点岩木山、344m)までは、鳳凰山からほぼ700mの距離である。このコース全体が播州地域独特の円みをおびた、低いにアップダウンの厳しい尾根道の連続となっている。それが「アルプス」を冠した名前の所以なのであろう。そんな山道の途中には場違い? と感じられる「西播磨の山城へGO」という幟が離れた2ヶ所に立てられている。西播磨県民局が主催している「西播磨山城復活キャンペーン」の一端なのだそう。地元の意気込みが感じられて微笑ましい。



生駒山山頂そのものが駒山城跡となっている

大鳥山の分岐に戻ってから、来た道を90度東に振った基本コースに入る。いきなりの急角度の下りで、注意が必要だ。摺鉢状になった谷底から登り返すと空堀や土塁の跡があり、さらに駒山城の二の丸跡、本丸跡へと続く。この本丸跡が生駒山(260m)の山頂で、往時を偲ばせてくれる。また、そこから下る岩肌には「馬の蹄跡」と言われる円い穴が何箇所も開いているのが見られる。その穴は、前述の凝灰角礫岩の「礫」が抜けた痕だそう。

生駒山からはこちら側、井上登山道の登山口にある「延命地藏」を経てほぼ2・2km、1時間ほどでJR上郡駅に着く。

【コースタイム】 JR上郡駅(30分)羽山登山口(20分)羽山(1時間15分)大鳥山(2時間)岩木山(2時間)大鳥山(50分)生駒山(40分)生駒山登山口(20分) JR上郡駅

【問合せ先】 上郡アルプス実行委員会・大澤敏明氏 (TEL 079 1-521 6330)

N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

北山荘―セルフビルド・セルフメンテナンส์による山小屋の80年【前編】

京都一中・鴨沂高校・洛北高校山岳部OBの会（北山の会）
会長・黒田俊郎

1942年、山小屋「北山荘」は京都北山の雲ヶ畑上流部に京都一中山岳部員らの手によって新築された。その15年前の27年に西堀榮三郎らによって造られた小屋が老朽化したため、やや上流部に移動した場所に後継として建てられたのであった。

以来、80年余りが経過したが、北山荘は現役・OBによって維持管理が継続され、現在も建築当時の姿をほぼ保ちながら広く利用されている。なお、北山荘の名は旧小屋に対しても用いられ、35年の『登山とスキー』2月号に「中山岳部



屋根の葺き替え作業

員・松井憲一郎による記載がある。以下に、北山荘に見られる山小屋の創建と維持管理の歴史を紹介したい。

山小屋のセルフビルド

新築に当たり、水源の沢に近いが氾濫しにくく日当たりの良い南面側で、見通しの良い炭焼き小屋跡が立地として選ばれた。7

9月、学校近くの工務店棟梁とその親族1、2名とともに山岳部員と一中生による夏休み中の勤労奉仕延べ300人により歩荷・地ならし・建設が行なわれた。

丸太・板・杉皮など資材は小屋近辺の樹木ではなく、そもそも木材生産地である麓から調達されたもので、地元卒業生の父兄からの寄付もあった。ほとんどが杉材で、地の利を得てまさに真正銘北山杉本場の建物となった。このように、棟梁は専門家であるが、ほとんどの労力は当事者自身の素人集団によるものであった。総工費は約1050円（用材寄付を除く）と記録されている。

小屋の構造としては桁行4間×梁行2間（7・2m×3・6m¹25・9m²、杉皮葺きの切妻屋根を持つ平入りの平屋建てである。内部は土間と板間に分かれ、外壁は半割丸太仕上げ、排煙のための越屋根があり、真下に囲炉裏が切られている。

小屋は、日帰り・小屋泊まりの起点となり、また、新たな山行を計画する場や友と語り合うコンパの場となっている。中2階もあって、収容人員は30名である。火は

囲炉裏と時計型ストーブ、水は外の沢を使用する。寒い時期の泊まりはつらいが、囲炉裏に頼り「煙い小屋でも黄金の御殿……」を地でいくしかない。このフレーズは西堀が「雪山賛歌」で旧北山荘を詠ったとされる。当初煙出しがなかったが、のちに増設され、新しい小屋ではこの経験を踏まえ最初から越屋根付きであった。

以上のように、北山荘の創設は使う者が造り、所有者でもあるという、今でいう「セルフビルド」であり、維持管理・修理もほとんどが自分たち自身で行なっていくのである。

竣工後3年で終戦を迎え、45年には世相の乱れからか、窓ガラスが盗難に遭い、建具などが燃料にされてしまった。翌年から各所の修理が行なわれたが、学制改革で新制高校となった鴨沂高校・洛北高校の山岳部員によるものであった。

以下次号【後編】で、戦後行なわれた山小屋の大規模修理の歴史を振り返り、「セルフメンテナンส์」についてお伝えする。

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

北海道支部

北海道支部主催で

「野村良太講演会」開催

昨年、宗谷岬から襟裳岬まで延々670km、北海道を背骨のように貫く分水嶺を、単独でしかも連続して63日間懸けて縦走するという、史上初の快挙を成し遂げた野村良太さんの講演会を、2月5



映像を交えながら講演会を行なう野村良太氏(右)

日(日)札幌で開催した。

野村さんは現在28歳。大阪に生まれ育ち、北海道大学に進学してワンダーフォーゲル部に入部、休学までして山登りに打ち込んだ。卒業後も山に関わることをライフワークと考え、登山ガイドをしながら単独で積雪期の知床半島縦走、日高山脈全山縦走などの困難な登山を経験。そうした長期、単独、積雪期登山の延長線上の取り組みとしてこの分水嶺縦走を計画したという。

おとしし3月、南から北への北上するルートで試みるも10日目で挫折。計画を練り直して去年2月26日に宗谷岬を出発して、北から襟裳岬を目指す南下ルートで再度挑戦し、見事今までだれもやったことのない快挙を達成した。登山の様子は、昨年末と1月にNHKでテレビのドキュメンタリー番組「白銀の大縦走 北海道分水嶺ル

ート670キロ」として放送されたので、視聴された方も多いと思うが、講演会ではテレビでは分からない計画の細かい部分や、放送では使われなかった未公開の映像も紹介された。

特に快挙の陰にあった思わぬアクシデントや裏話、大雪山や日高の絶景なども現場での音声リポート付きの動画もスクリーンで上映され、臨場感あふれる講演となった。また、今回の計画実行のきっかけについて、野村さんは講演の冒頭で2人の先人の著作を紹介した。

工藤英一著『北の分水嶺を歩く』（1994年刊）そして志水哲也『果てしなき山稜』（1995年刊）、ちょうど彼が生まれたところに出版された本だ。工藤氏の「あとがき」にある「完全単独ワンシーズンであれば、極地の単独歩行横断に匹敵する、最も困難ですばらしい記録になることは間違いない。（中略）これからの若き岳人に期待している」、志水氏の「これは比類のない美しいルートだ」、こうした言葉に大いに触発されたと話す野村さんに、2人へのリスペクトも感じられた。

ちなみに工藤氏は15回に分けて足掛け17年費やしてこのルートを初めて踏破、志水氏は工藤氏の報告書を読んで半年間で12分割して歩き、ワンシーズンでは初の記録を達成している。

670kmに及ぶ分水嶺のルート上には除雪された道路が横切る峠はあるものの、人家や街は一切ない。そこを40kgから45kgもの荷物を背負い、63日間たった独りで縦走した野村さんは強靱な体力と精神力の持ち主には違いないが、けっして「孤高のクライマー」という印象はなく、講演での話しぶりは明るく朗らかで謙虚な好青年という感じだ。

「単独の登山をいっぱいやっているが、山はみんなでワイワイ登る方が好き」というひと言にもそんな人柄が感じられた。野村さんは「植村直己冒険賞」を受賞、日本山岳会にも入会され、北海道支部に所属することになった。今後いつその活躍を期待したい。なお、この講演の模様はYouTubeで公開されているので、「野村良太講演会」と検索すれば視聴可能である。

(北海道支部長・藤木俊三)

神奈川支部

「かながわ山岳誌」プロジェクト、最終山行を迎える

2017年度から始まった「かながわ山岳誌」プロジェクトについては、会報864(17年5月)号と同899(20年4月)号で報告したところである。また、第1回山行の詳細は『山と溪谷』17年6月号(190ページ)に掲載された。当初5年計画で進めていたが、台風による登山道の崩壊やコロナ禍による外出規制が重なり、6年掛かりとなった。ここでは、山と峠を実際に踏査した経緯や記録と特に印象に残った事例を報告する。

《山行計画》

最初に、県内の山と峠282ヶ所を踏査するに当たり、地形図に目標点を書き込んだ。それを基に踏査可能な経路を考え、コース案を作成した。次にLコース(初心者コース)とHコース(熟練者コース)に分け、リーダーを選任して山行計画書をまとめた。原則は日帰り山行である。実施日は、第2週土曜日をLコース、第4週土曜日をHコースとして実施した。

第38回図書交換会

図書委員会

永らくお待たせしました。風薫る5月20日(土)、しばらく新型コロナウイルスのため開催できなかった図書交換会を以下の要項で開催します。

今回は東京新聞の旧岳人編集部が所持していた書籍と故・水野勉会員のご遺族から寄贈された書籍(両方合わせて234冊)、さらに図書室に新刊が入庫したため不要になった旧版のガイドブックなど(183冊)を対象とします。書籍の価格は一律、1冊500円としますが、旧版のガイドブックと状態の悪い書籍については無料にしました。この機会に山書に興味のある方、または古いガイドブックが欲しい方は、同封の図書交換会出品図書リストをご確認の上、ふるってご参加ください。

◇日時 令和5年5月20日(土) 13時開場、14時半から抽選を開始します。日本山岳会ルームで参加される方は出品されている本をご覧の上、抽選開始時間までに購入申込みをお願いします。

◇会場 日本山岳会ルーム(集会室と104号室の両方で陳列、集会室で抽選会を行ないます。

室と104号室の両方で陳列、集会室で抽選会を行ないます。

*なお、遠隔地在住のため出席できない会員も事前に購入申込みができます。その場合の申込み方法は次のとおりです。

◎郵便(日本山岳会 図書委員会宛) またはメール(図書委員会 jacml-toshokokukan@jac1.or.jp)で4月30日までにお申込みください。

◎事前の購入申込みをする方は、購入希望図書の番号、書名(同封のリストをご覧ください)、購入希望者の名前と会員番号、書籍の送り先住所、また、Zoomでの抽選会視聴を希望する方はメールアドレスをご連絡ください。

◎購入図書の送料は購入者負担とし、代金と一緒に請求させていただきます。

◎複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ない、当選した本は交換会終了後にゆうパックなどでお送りします。

◎Zoomで抽選会を中継しますので、遠隔地在住でZoomの環境がある方は、ぜひ視聴することを検討してみてください。

●問合せ 日本山岳会事務局(図書

委員会まで

☎03-3261-4433

✉jacml-toshokokukan@jac1.or.jp

図書交換会は第1回が開かれたのが昭和43年という由緒ある行事です。そのときの提案者は松方三郎さん、当時の図書委員長が深田久弥さんでした。「会員の持っている山岳図書の交換、販売会をやるうではないか」(会報『山』273号・1968年3月)と、図書委員会の席で提案があり、不要になった山の本を、会員同士で交換しようという趣旨で始まりましたが、諸事情により平成2年の第23回を最後に休止、それを故三好まき子さんを中心に復活させたのが平成19年の第24回です。平成26年の第31回からは年次晩餐会の会場で行なわれ、地方の会員が直接本を手に入れるため、会場での申込み者が一挙に110名に増え、抽選の倍率が高くなりました。その後、新型コロナウイルスによる年次晩餐会休止に伴って図書交換会も休止していましたが、会員の強い要望に応じ、会場を元のルームに戻して今回の復活となりました。

踏査後は、以下の点を記録した。実施日と参加者、踏査点の緯度・経度・標高、登山道の状況、歩行時間、三角点の位置と保存状況、人工施設の現況および地形図との相違点、その他の特記事項、写真を添付した山行報告書である。

《踏査実施》

実際に歩く経路は、実線や点線で地図に記載されていれば問題ないが、経路がない場合は等高線や尾根・沢筋を見極めてコース取りをする。本来は地形図・コンパス・高度計の3点セットにより現在地を確認するが、これらをすべてGPSに任せて楽をさせてもらった。特に地形が複雑な西丹沢の菰釣山・大樽・織戸峠・椿丸・浅瀬橋のルートや、西丸・東丸・水ノ木橋、大タル丸・女郎小屋ノ頭、北丹沢のガタクリ峰、三浦半島の扇山、箱根の丸山、台ヶ岳、文庫山などは、GPSを持たなければ目標点に到達できなかったであろう。また、三角点の位置を探すに当たつてのGPSは、大変有益であった。

《文化情報》

山頂や登山道および主な拠点に

は、様々な案内板が立ち、歴史や伝説を教えてくれる。たとえば、関東征討の日本武尊の足跡や新羅三郎源義光の笛塚などがある足柄峠、源頼朝が敗れた石橋山古戦場、北条氏と甲斐武田氏が戦った三増合戦場、豊臣秀吉が小田原城を包囲した一夜城など合戦に関するもの。また、峰山、姫次、鐘撞山には、雛鶴姫や折花姫の悲話が残る。これらの案内板に記されたものを、文化情報として踏査記録の後に織り交ぜた。地場の貴重な情報を後世に残したいからである。

最後に、プロジェクトの最終山行は、4月15日(土)に大磯鷹取山・湘南平で行なう。踏査が完了したことを、湘南平に立つ岡野金次郎碑に報告して、フィナーレ・イベントを実施する予定だ。

《出版計画》

6年越しとなった「かながわ山岳誌」プロジェクトを本にまとめ出版する構想が立ち上がり、現在、山と溪谷社と打ち合わせをしている。出版部数は1500部、販売価格を2000円程度とする予定だ。日本山岳会会員はもとより、全国の山を愛する皆様にぜひとも

購入していただき、神奈川の山々への興味を広げて欲しいと願って

いる。

(神奈川支部・田島剛)



天の里 高所集落を訪ねて
天野一郎著
2022年11月 180頁
白四六 1000円+税



天の里 高所集落を訪ねて
天野一郎著
2022年11月 180頁
白四六 1000円+税

著者の天野一郎氏は奥多摩山岳会で活躍してこられた方で、「たをり」同人。その同人誌に連載してきたものをまとめて、白山書房から2016年に『につぼんの山上集落を訪ねて』を出版されている。この著書はその続編とも言えるものだが、元氣なお年寄りたちの副題があるように、集落の紹介とは言いながら、むしろ、そこに長く

暮らすお年寄りに焦点を当て、話を伺うことを通じて集落の歴史や文化、また、その方の人となりや暮らしそのものを浮かび上がらせている。気になる集落の取材は、そこに長く生活し、語れるお年寄りを探すことから始まる。このアプローチは、テレビ番組の「ボツンと一軒家」を思い起こさせる。

取材対象は若くても後期高齢者で、中には96歳という、まさに元氣なお年寄りもおられる。今回取り上げられたのは西上州をはじめ、長野県、山梨県が多いが、奈良県は大峰山麓の川上村や岐阜県の野麦周辺などにも及ぶ37の集落で、いずれも登山で馴染みのあるエリアである。

「天の里」という響き。明るく開けた眺めの良い山上の集落には、

寄附金および助成金などの受入報告(2月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
鈴木 幹夫 会員	100	ヤマトシプロジェクト寄附金
恒成 秀洋 会員	10	ヤマトシプロジェクト寄附金
村越 稔 様	10	ヤマトシプロジェクト寄附金
大田 由孝 会員	30	ヤマトシプロジェクト寄附金
酒井 秀紀 会員	10	ヤマトシプロジェクト寄附金
前田 隆久 会員	10	ヤマトシプロジェクト寄附金
吉村 千春 会員	10	ヤマトシプロジェクト寄附金
その他匿名希望者等	45	ヤマトシプロジェクト寄附金

あこがれにも似た感情を抱くが、そこでの暮らしの厳しさには想像を絶するものがある。しかも昔は車の通れる道もなく、水道もなく、ほぼ自給自足での生活を強いられしてきた。中には狩猟の名人もおられるが、その特産品を作つてわずかな現金収入を得たり、林業に携わつて生活を維持されてきたおじいちゃんたち。峠越えして、あるいは下の集落から嫁いで来て、ずつと暮らしを支えてきたおばあちゃん方。楽しみといえば年に一度のお祭り、といった厳しい環境を潜り抜けてきて、今は車で町のデイサービスに通うのが楽しみと

おつしやる方も多い。道路、水道、通信手段などが改善され、生活は町と変わらなくなってきた。昔話になりつつあるそんな思い出を、天野氏と陽の当たる縁側で語るお年寄りの優しい眼差しが目につく。ぶようだ。

なお、海外の高所集落も5ヶ所紹介されており、「小さな村の物語 イタリア」というテレビ番組が頭をよぎった。

いま、古道調査が行なわれている。峠の両側には最奥の集落があるはずだ。登山の際にこうした集落を訪ねる新しい山の楽しみ方の、良いガイドブックにもなり得ると感じた。

(荒井正人)

源流居酒屋

よーこさんたいしょう著



2022年7月
山と溪谷社
A5変型判 184頁
1800円＋税

人里から遠く離れた沢の源流の奥地に分け入り、河原にタープを

張り、満天の星空を眺めながら釣果のイワナを焼き火で炙つて夕餉として静かに酒杯を傾ける。こんな贅沢な山行は年季の入った山やならだれしも一度はしてみたいとあこがれるであろうが、本書にはそうした大人の沢の楽しみ方とノウハウが満載されている。といっても、昔からよくある一部のマニア向けや、単純なハウツー本ではないのが本書のユニークなところである。実は図書紹介とは言うものの、本書に登場する「源流居酒屋」の営業ドメインは、元々紙の本が媒体ではなくてネットの世界のYouTubeが源流なのである。

源流居酒屋の親方である、たいしょうは、医療機器メーカーに長年勤めた沢好きのおっさんであるが、その人柄の良さなのか山料理の腕に惹かれてか、沢仲間や女性たちに支持されていつも満員御礼。居酒屋の謂は、たいしょうの山料理のレシピと、味に感動した仲間たちが「源流居酒屋」と命名して動画配信を始めたらブレイクしてしまい、ついには手製の暖簾まで作成してしまったとのこと。

源流居酒屋のレシピは数多くてとても全てを紹介しきれないが、

はただ者ではないのだろう。元々はデザイナーとのことで本編でも動画編集にYouTube担当であるが、釣りも料理の腕前もたいしように引けを取らないようだ。何人かいる客人もただ者ではない。自称「てんからばあ」のおばはんの串揚げは、たいしょうも感動して自分では作れないと脱帽する一品らしい。早速動画を見てみると、なるほどと頷ける手捌きだ。

レシピはイワナ料理をメインに山菜ときのこと料理、おつまみ、朝ごはん、昼ごはん、飲み物、デザートと幅広い。コーヒーへのこだわりは自家焙煎した豆を持参するほどで、正統派の昭和の山々の香りを感じさせる。焚火の火の起こし方やグッズにも源流居酒屋流のこだわりとノウハウがある。

レシピを中心に山料理の参考書として使いたければ、全て料理の種類別の索引形式になっており、本を片手にスマホから動画に飛ばせば調理現場がリアルに再現される。ひと昔前に喧伝されたマルチメディアの世界なのか、今はやりのメタバースの世界と言えるのか、ついに山奥の源流にもそんなバーチャルな世界が進出したらしい。た

った1冊の本がネットとの組み合わせで、こんなに楽しめればつい源流に出掛けて真似してみたくなくなるが、もちろんそれには山や沢でのスキルと経験が必要であり、近ごろはやりの○○○キャンプのように初心者が気軽にまねできるも



のではない。しかし、そのギャップがまた面白い。まさに昭和の山のノスタルジーと令和のバーチャルな楽しみ方がハイブリッドにたくさん詰まった、楽しい一冊と言えるだろう。
(森田栄二)

令和4年度第9回(2月度)理事会

議事録

日時 令和5年2月15日(水) 19時
00分

場所 Zoom(オンライン) ルーム

【出席者】古野会長、坂井・山本・橋本各副会長、柏・萩原・南久松各常務理事、松原・松田・清水・飯田・久保田・平川・川瀬・長島各理事、佐野・黒川監事

【欠席者】なし
【オブザーバー】なし

【審議事項】

1・退職金規定の制定について審議した。数日中に会長、財務担当など関係者に意見を申し出ることので会長一任とした。(南久松)

【協議事項】

1・次期理事会について人選方法を含め意見交換を行なった。(柏)
2・支部山岳祭補助金について協議し、賛成が得られたので来月の理事会で起案することになった。本部予算で支出する。(坂井)

【報告事項】

- 1・正会員82名(うち69名は準会員からの変更)、準会員10名の入会承認報告があった。(古野)
- 2・22年12月時点での財政状況について報告があった。(南久松)
- 3・予算書、事業計画書提出について報告があった。(柏)
- 4・事務局員の新規雇用について報告があった。(坂井、柏)
- 5・永年会員で住所不明の会員について報告があった。(柏)
- 6・除籍予定者について報告があった。(柏)
- 7・アマ・ダブルチーム、マナスル隊カンパについて結果報告があった。

『山岳』第118年の原稿募集

本会の機関誌『山岳』第百十八年(2023年)の発刊は、本年8月下旬を予定しております。原稿の締め切りは5月下旬となりますが、会員の皆様方からのご投稿をお待ちしております。なお、採否につきましては、恐縮ですが編集委員会に一任させていただきます。

手書き原稿でも結構ですが、できますれば下記宛、メールでのご連絡、ご投稿をお願い申し上げます。

[送り先] 〒145-0064 大田区上池台1-35-5 神長幹雄

TEL 03-3720-7569 E kaminaga@ruby.dti.ne.jp

(『山岳』編集委員会)

図書受入報告(2023年2月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
すがぬま みつこ	旅の絵はがき(画文集)	21×21cm	すがぬまみつこ(私家版)	2022	著者寄贈
すがぬま みつこ	まきばへ(画文集)	22×30cm	本作り空Sola	2020	著者寄贈
J.サンクトン(著) 越智正子(訳)	人類初の南極越冬船ベルジカ号の記録	443p / 19cm	バンローリング	2023	出版社寄贈
A.ランシング(著) 山本光伸(訳)	エンデュランス	409p / 19cm	バンローリング	2014	出版社寄贈
高野聡	播隆信仰と仏教: 槍ヶ岳開山播隆上人	331p / 21cm	ブイソーソリューション	2022	著者寄贈
M.シノット(著) 古屋美登里(訳)	第三の極地: エヴェレスト、その夢と死と謎	600p / 19cm	垂紀書房	2023	出版社寄贈
有世独信	有世独信小品集	80p / 19cm	羽衣出版	2023	著者寄贈
吉川賢	森林で何が起きているのか(中公新書)	231p / 18cm	中央公論新社	2022	出版社寄贈
田辺寿	Nabe Sketch 2023	128p / 21cm	田辺寿(私家版)	2023	著者寄贈
田部重治	峠と高原[新編](ヤマケイ文庫クラシックス)	431p / 15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
上田哲農	上田哲農の山[新編](ヤマケイ文庫クラシックス)	527p / 15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
大石明弘	太陽のかけら: アルパインクライマー谷口けいの軌跡(ヤマケイ文庫)	375p / 15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
宮田八郎	穂高小屋番レスキュー日記(ヤマケイ文庫)	275p / 15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
金邦夫	悔るな東京の山: 新編 奥多摩山岳救助隊日誌(ヤマケイ文庫)	320p / 15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
J.クラカワー(著) 井上大剛(訳)	Wilderness and Risk: 荒ぶる自然と人間をめぐる10のエピソード	276p / 19cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
藤原章生	酔いどれクライマー永田東一郎物語: 80年代 ある東大生の輝き	383p / 19cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈

20日	会報編集委員会 資料映像
18日	ブ
17日	理事会 アルピニズムクラブ
16日	山遊会 かつばの会
15日	マウンテンカルチャークラブ
14日	ブ
9日	図書委員会 フォトクラブ
8日	想倶楽部 山岳古道PT 休山会 山
7日	ルクラブ
6日	スケッチクラブ グローバ
3日	支部事業委員会 休山会
2日	岳地理クラブ
1日	山行委員会
2日	YOUTH CLUB 山
ルーム誌 2月	
【その他】	
1・「山」2月号発行について(栢)	
8・収蔵品の燻蒸作業について報告があった。(清水)	
9・上高地山岳研究所利用状況について報告があった(川瀬)	
(松原)	

委員会	総務委員会	フォ
トクラブ		
21日	記念事業委員会	バックカ
	ントリークラブ	
22日	子どもと登山委員会	みち
	のり山の会	麗山会
24日	記念事業委員会	
27日	緑爽会	
28日	平日クラブ	
	2月来至者	209名

会員異動 物故

真家雅彦	(5921)	20・12・28
川井英憲	(7739)	22・7・20
山本高由	(9074)	22・7・20
大江純一	(12259)	23・1・2
遠藤光義	(15540)	23・2・13
退会		
市川 正	(6661)	
都竹祥子	(8223)	
萩原 裕	(10254)	
高比良昭	(10546)	
高橋てる子	(11341)	神奈川
熊谷友昭	(11508)	埼玉
大岡省三	(12294)	
恩田小夜子	(12296)	
富永 剛	(13761)	
島田 博	(14736)	
皆川朝一	(15231)	

亀山健太郎(15811)東京多摩
菊池 徳(15852)東海
根本路子(15944)茨城
松本洋子(16156)東海
佐藤陽子(16893)越後
森田恭世(A0375)埼玉
竹下智子(A0414)埼玉
*2022年6月6日付で退会届

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

けを受理した沖陽輔(16696)様(「山」2022年7月号18ページ、会員異動退会欄に掲載)は、退会撤回の申し出があり、これを認めることとしました。

総務担当常務理事 柏澄子

◆上高地 多田多恵子先生と歩く 花の講座

「上高地クラブ」というのが昨年自然にできたことは、会報でご報告しました。その会で5月20・22日、多田多恵子先生(理学博士、『美しき小さな雑草の花図鑑』など植物関連の著書多数)と上高地を歩きます。

山に登って高山植物を美しいと思われる方、夏に上高地でインタープリターをやりたい方、どうぞご参加ください、20日の昼に上高地集合、22日の14時ごろ解散です。

12人で締め切ります。宿泊は上高地温泉ホテル。参加費は宿泊を含み飲み代別で3万円。

また今夏に、本講座に参加された方々での「インタープリター体験」を行ないます。

(zero@qb3.so-net.ne.jp 大森弘一郎へ)

「会員優待サービス」変更のお知らせ

【北アルプス】七倉山荘/日帰り入浴料大人660円↓600円に変更

◆編集後記◆

●現在、皇室や旧華族の方々の登山について、記録を残しておこうという本作りに携わっておりますが、本会の『山岳』および会報『山』がデジタル化されたことによって、大変助かっております。

●皇族登山の嚆矢は大正5年、東久邇宮稔彦王の槍ヶ岳登山で、従来、登頂後は大天井岳・燕岳・中房温泉を歩かれたとされていましたが、少し違うようです。『山岳』第11年第1号の「雑報」欄(新聞各社記事を収録)を見ますと、「御下山の途につかせられしが途中日暮れ提灯を振り翳しつつ無事上高地温泉に御引返し……」とあります。縦走の予定でしたが、結果的にはピストンだったのです。このように事実確認でき、デジタルメディアア委員会に感謝です。(節田重節)

日本山岳会会報 山 934号

2023年(令和5年)3月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社